

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0754 ◆◆◆

23/09/06

【 8 月のドル/円変動は今年最小、9 月「復活」なるか注目 】

先週終了した 8 月相場は、月間変動幅が 5.85 円で今年の最小変動となった。良くいえば、ようやく相場が「落ち着き」を取り戻しつつあるのかもしれない。

しかし、月が替わってスグの 9 月 1 日、米雇用統計の発表もありドル/円相場はなかなかの乱高下。そして今月はこのあと 19-22 日に注目の日米両中銀による金融政策の発表なども予定されている。再び波乱含みの様相を呈する可能性も否定的でなく、油断は禁物との見方も取り沙汰されていた。

◎昨年 9 月は 23 年ぶり「円買い介入」観測、今年も要注意!?

恒例となっている過去の経験則を参考に、月間見通しを以下で考えてみたい。

まずは 1990 年以降昨年まで過去 33 年間の 9 月相場の勝敗表を調べてみると、18 勝 15 敗だった。若干ドル高有利ではあるが五分に近い内容で、大きな特徴は言えないようだ。

方向性と言うことでは特徴に欠ける 9 月相場だが、別の大きな特徴が見られている。それは「ほかの月に比べて大きな値幅が観測される」ーと言うことだ。

実際に過去の 9 月相場の変動を幾つか取り上げると、その典型例は月間に 11.15 円動いた(年間 3 位の大変動、以下同)1998 年のケースだろうが、そのほかでも 1999 年は 8.20 円(同 4 位)、2002 年の 7.41 円(同 4 位)、2003 年の 7.63 円(同 1 位)、2005 年の 4.94 円(同 2 位)、2014 年の 5.76 円(同 4 位)、2017 年の 5.94 円(同 2 位)ーなどといったように枚挙に暇がない。

翻ってみると、為替に限らず金融市場のジンクスとして、「ハリケーン・シーズンの為替相場は荒れ易い」と言われることが儘ある。

そんなハリケーン「イダリア」が 8 月末に米フロリダ州に上陸し大きな被害を与えたうえ、日本においても一時太平洋上に 3 つの台風が位置し、本土襲来の危険性も指摘されていたことも記憶に新しい。うち 11 号は 5 日早朝熱帯低気圧へと変化したものの、別の熱帯低気圧は逆に勢力を強めると台風となりそう。そして、今週末にも関東へと接近する可能性があるという。いずれにしても、そうした事案を考慮すれば、足もと 9 月の為替相場は月間を通して荒っぽい相場変動に注意すべきであると言えそうだ。

一方、為替の動きは一旦棚上げし、過去の 9 月をニュースの視点でみてみると、何故か金融関係の重大事件の起こりやすいことが知られている。

実際に幾つか例を挙げると、「プラザ合意(1985 年)」を筆頭に、「いわゆるブラック・フライデーが起こる(1986 年)」「英ポンドと伊リラが ERM と呼ばれた当時の欧州通貨のバンド制から離脱(1992 年)」「大手ヘッジファンド LTCM の巨額損失発覚(1998 年)」「リーマンブラザーズ破たん(2008 年)」ーなどとなる。また昨年の 9 月 22 日には、あの 23 年ぶりの政府・財務省による 2.8 兆円規模とされる「ドル売り・円買い介入」が実施されたことを記憶している方も少なくないのではなかろうか。ドル/円の動意如何、たとえば 150 円接近などという動きになるならば、足もと 9 月に「2 年連続の円買い市場介入実施」ーという展開を否定できないかもしれない。

さらに、金融に直接関係ない「大事件」も少なくない。こちらにも実例を挙げれば、古くは「関ヶ原の戦い(1600 年)」や「清英でアヘン戦争(1839 年)」「マッキンレー米大統領狙撃事件(1901 年)」「日露戦争終結(1905 年)」「第二次世界大戦はじまる(1939 年)」ーなど。比較的最近では「イラン・イラクが全面戦争へ(1980 年)」「米国同時多発テロ(2001 年)」が、やはり 9 月に起こっていた。

そうした観点からすると、2021 年の 9 月に「中国恒大集団」の利払い不履行問題の第一報が伝えられ、現在にまで至る「中国不動産危機」が発覚したという符合も気に掛かる。一方で、今月 4 日にはブルームバーグなど複数メディアが「碧桂园、土壇場でドル建て債の利払い実施しデフォルトを回避」したと報じていたものの、ドル債の償還などはこれからも断続的に訪れるわけで、危機は次から次へとやってくるのが予定されており、単に一息ついたに過ぎない。2 年のときを経て、中国不動産バブルの崩壊がいよいよ現実化すると考えてしまうのは、あまりに我田引水、そして穿ち過ぎな見方だろうか。(了)

